

## 傍らで起きているが、既に他人事ではない

富山一郎

大学院生のとき、翻訳されたばかりのイマニュエル・ウォーラーステインの『近代世界システム』を、友人たちと精読したことがある。またその後、『資本主義世界経済』をはじめ次から次へと刊行される彼の議論を、熱心に読んだ。それはちょうど冷戦という時代が次のステージに動き出し、その徴候が複雑な暴力的状況として登場しはじめた時でもあった。彼の議論に、世界を説明する論理を探していたのかもしれない。

その壮大な歴史観に感動しながらも、「世界システム」において何よりも驚いたのは、この概念には外部がないということだった。グローバル・ヒストリーの源流でもあるフェルナン・ブローデルの「地中海世界」を継承しながらも、「世界システム」がそれと決定的に異なるのは、ブローデルがあくまでも膨大なドキュメントを駆使しながらある意味で遂行的に歴史を描き出したのに対して、ウォーラーステインは「世界システム」を、総てを説明する前提として設定している点にある。そしていま、グローバルという言葉に出会うたびに、この「世界システム」への驚きと違和感を思い出す。

以前グローバルCOEの事業として、「コンフリクトの人文学」というプロジェクトを行なったことがある。このプロジェクトにかかわる研究対象には、とりあえず民族紛争、宗教対立、地域紛争、国際紛争といった世界中のコンフリクトが、テーマとして設定されていた。しかし次第に浮かび上がってきたのは、論じられる暴力的状況とは裏腹に、研究それ自体の耐えられない軽さだった。この軽さを、「コンフリクトの安寧」とよんだこともある。

コンフリクトという概念は、力学的関係であると考えられている。そこには対立と同時に対立する力のベクトルを定義するベクトル場が前提とされている。力学系にはそれを定義する関数が存在するのだ。そしてこの耐えられない軽さは、こうした関数を定義する行為にかかわっている。関数を定義する行為は、関数を前提とする力学に巻き込まれることはないのだ。いわば、コンフリクトのアクターとして設定された他者を論じれば論じるほど、コンフリクトに巻き込まれたくないという研究者の隠された身ぶりが浮かび上がるのである。これが、「安寧」の正体だった。

だがしかし、いわゆる災害や惨事もふくめた暴力的状況とは、このベクトル場

自体が液状化し、前提が踏み抜ぬかれていく事態でもある。力はおとなしくベクトル場に収まりはしない。したがって真の意味でコンフリクトとは、対立ではなく、対立を定義するその前提自体の崩壊なのだ。そこには安寧の場所は既になく、観察できる他者もない。生起する状況は、傍らで起きているが既に他人事ではなく、観察者自身の場所に浸透し、研究行為自体を巻き込んでいく。COEのプロジェクトでは、ここに出発点を据えようとした。そしてそれは、やはり危機の問題でもある。

2015年の夏、この危機を考えていた。正確に言えば危機の中で遂行される研究行為を考えていたのである。力関係を定義しその正しい意味を饒舌に論じる安寧の場所は既になく、巻き込まれながら思考する以外に道はないのではないかと。またそこにこそ、いま目指すべき知があるのではないかと。さらにまたその知の要点は、正しい危機認識の確立とその普及ではなく、知的行為自体が危機の中から新たな関係性を生み出す遂行性を帯びることではないかと。

前提が崩壊する危機においては、何が起きるかわからないし、既に何が起きていたのかもわからない。そしてだからこそ、何でも可能なのである。あるいはそれは、2011年3月11日以降よく読まれたレベッカ・ソルニットのいう、災害という状況でもあるのかもしれない。危機とは「変わる可能性のある現在」であり、「何が起きるかわからないという災害の警告は、なんでも可能だという革命の教えから、そんなにかけ離れてはいない」のだ（ソルニット『災害ユートピア』高月園子訳、亜紀書房、2010年）。

危機は、解決しなければならない課題でもなければ、一刻も早く秩序を取り戻さなければならない混乱や対立でもなく、世界が暫定的な存在として浮かび上がる事態ではないのだろうか。そこで求められている知覚は、何が起きるかわからないという不安に耐えながら、そこから垣間見ることのできる別の未来を予感することではないのだろうか。「世界システム」のような世界の総ての事象の時空間に意味を付与する原理は、やはり存在しないのだろうか。前提を設定する安寧の場所はなく、グローバル・イシューは、イシューを論じる者たちの足元に、既にまちがいなく浸透しているのではないだろうか。

傍らでおきていることはすべて、既に他人事ではない。あるいはこういってもよい。自己とは、既に傍らの存在にかかわることでもある。やはり巻き込まれるしかない。巻き込まれながら、危機の中から現勢化する可能性を予感し、それを言葉として確保すること。そこに私たちの論文があるのだと思っている。